介護老人保健施設しおさい

症　例　概　要　利用者氏名：H.Y様（70代・男性・介護度3）

利用期間：令和元年5月～令和元年8月 しおさい入所を利用

病名：左大腿骨頸部骨折（保存的）・認知症

既往歴：高血圧症・中耳炎・イレウス・大腸ポリープ（良性）・ヘルペス・認知症
左大腿骨頸部骨折（保存的）・小球性正色素性貧血（内服治療）

経過：介護サービスを利用しながら独居にて生活されていたが、認知症の進行により在宅での生活が困難となり、令和元年5月にしおさい入所となる。

入所当初、表情も硬く、介護に対する拒否の中で殴る、蹴る、噛み付くなどの暴力行為が見られていたが、コミュニュケーションをこまめに取り、職員それぞれが生活歴などを考慮したアプローチを含め関わっていったことで、表情が柔らかくなり介護拒否、暴力行為の軽減が見られ、少しずつHさんらしさが見られるようになった事例。

内　　容

Hさんは認知症の進行に伴い介護拒否も強く他施設でも入所受け入れ困難な方でした。しおさいに入所当時のHさんは職員の声掛けに対しても反応はなく、ADL介助をさせて頂く際も、無視や「何するんだ」「この野郎」等の暴言や時には叩いたりする行為も見られ、今後施設での生活をして頂く上でコミュニュケーションをどのように行っていくかを課題としました。

まずご本人の情報を集め、ご家族の面会時にHさんの生活歴や好きな事などの話を聞かせて頂き、その中でHさんの生い立ちにも触れ、船主の家に生まれ漁に出ていたが、父親が亡くなり後を継ぐ、その後食品加工会社勤務、退職後夫婦二人で生活、また、消防団団長や町会議員を務めた経歴もあり、地域の祭りにも積極的に参加し、太鼓を叩くなど地域の事をするのが好きだったと話されておりました。また、Hさんの事を、周りの人は昔からの屋号で呼んでおり、屋号で呼ばれる事に慣れているというご家族からの情報を職員間で共有する為のカンファレンスを開催しました。

まずは、日々のあいさつの中に屋号を取り入れあいさつを行ってみると、返事はないが振り向くなど、時には「おはよう」と返答してくださるようになりました。

そこから統一した対応方法を実施して行くうちに、自分から話しかけてくださる事も増え、また、懐メロを食堂で流していると両手をテーブルに置き指でリズムをとるなど、笑顔で「音楽はいいな～」とおっしゃっていた為、レクリエーションの時間や日常生活の中で、音楽を流す時間を増やしていくと、知っている曲やお祭りの曲の時には手拍子を叩いたり次第に表情に笑顔が見られる時間が増えてきました。以前はご家族の認識自体ができなかったのですが、以前より大好きな太鼓を通じ良い刺激となり、ご家族の認識や会話も少しずつ取れることが可能となり、ADL介助の面でも拒否などは減り声掛けに対して返答してくださるようになりました。また、何よりも顔だけ見て面会を終わらせていたご家族よりHさんがご家族を認識し面会時には昔と変わらない優しい笑顔を見せてくれ、たくさん会話が出来る様になったと大変喜ばれておりました。

入所した当初と比べると表情やHさんの雰囲気も明るくなり、職員も元気な頃のHさんが思い浮かぶことが出来ました。現在は、特養施設への入所が決まりしおさいを退所されましたが、退所間近のレクリエーションの時には他の利用者さんの前で太鼓のちょうしを取るなど、楽しそうなお姿を見ることが出来ました。以前はご家族の認識自体難しく顔だけを見て帰られていたご家族との時間を取り戻し、本来明るく人前で中心に立つHさんらしい施設生活を送っていけるきっかけとなった症例となりました。